小悪魔通販へようこそ

寿々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小悪魔通販へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ７７０８Ａ

【作者名】
寿々

【あらすじ】
主人公は「小悪魔通販」という不思議な通販を見つける。このサイトを運営しているのは３人の男女。この通販をめぐって、主人公は不幸の道へと引き込まれる。

第一話：～不幸の手紙～（前書き）

この話はホラーです。苦手な人は読まないことをお勧めします♪

第一話：～不幸の手紙～

今年の夏も去年より暑くて、あたしの気分は最悪だった。このクソ暑い上に男にふられちゃたまんない。
「亜衣奈はばかねぇ。指輪の一つでももらっときゃいいのに」姉は笑って言った。あたしはなるほどそうだとも思った。
雷鳴が轟き、あたしの耳には、ありふれた音楽と、雨垂れと、うっすら「別れよう」という声が走った・・。
その残像を掻き消すようにあたしは髪を掻き回した。そして、窓から見えるポストに届け物が入ったのを見て椅子から飛び降りた。トンッ・・・・と音を立て着地した。
雨が降る中、黄色のダサい傘を差してあたしはポストまで歩いた。わざと水溜りに足を入れると、靴下が水に侵食されていく。冷たくて心地よい。

カタンッ・・・・・・・・

あたしはいつもどおり、中身を確認した。母さんのと、父さんのと・・あ、これも父さんの・・・。なんだ、あたしのないみたい・・・。・・・・・・????「黒埼亜衣奈様」？
あたしへの手紙か！
タンタンタンタン・・・・・・・・・・・・・・・
残りの手紙を居間にほおり捨て、あたしは階段を駆け上がった。ギィッと音を立てて椅子に座り丁重に、丁寧に手紙の封を切った。中からは黒と白で彩られた紙切れが登場した。
「小・・悪魔・・・・通販・・・・・???」
白と黒の中には異色な赤でその文字は書かれていた。内容はこうだった。

「黒埼亜衣奈様。あなたは小悪魔通販へ来るチャンスを見事獲得いたしました。こちらでは、リング・ネックレス・イヤリングなどを扱っております。ぜひ一度ご来店くださいまし。」

ココまではいいのだが・・・・・・・・・

「木曜日、深夜2時ちょうどに「小悪魔通販」と検索してください。くれぐれも、お間違えのないように・・・・・・。」

あやしい。すんごくあやしい・・・。裏サイトとかに存在してそうな通販だ。でも、あたしは「リング」というのに魅かれた。「値段も格安です。最高金額は1000円です。」と、

あいたスペースに書いてあった。普通、リングは高いのだけれど・・・・。

「ね！小悪魔通販って知ってる？？」

次の日、あたしは友だちの井上彩香に聞いてみた。

「小悪魔通販？？？聞いた事あるよーな・・・・ないよーな・・・・。なんなのよ、それ。その、小悪魔通販っての」

あたしはとっさに嘘をついた。

「いっ・・いとこがね！なんか聞いたから・・・・知りたいんだって！その・・売ってるやつとか・・・どこにあるかとか・・・！」

「ふぅん・・・。怪しげなとこだね。名前からして。少なくともあたしは行かないな・・・・。菜月、どー思う？小悪魔商店・・じゃなくて小悪魔通販」

彩香はうしろで雑誌をめくっている遠藤菜月に声をかけた。菜月は、雑誌から目をはなし、少し考え込んだ。

「う～ん・・・。わかんないよぉ。あたし、機械とかメカとか弱いしさぁ。あ！でも通販っていったらテレビとかもあるよねぇ？う～～～。はうぅ～～～？？？」

頭を抱えて悩んでいる菜月を、彩香は「まぁまぁ、そんなに考えなさんな」と一言言ってこちらを向いた。短い髪がちゃっとゆれた。

「まっ！いかないほーがいいんじゃない？だいたい、通販ってその

ものが、あたしには怪しく感じるもんな。ま、いとこが行きたいってゆーんなら話は別ものだけどねぇ？」
「あたしも！さやりんにさーんせーいぃＶＶＶＶ。あーちんは？さやりんにさんせーー？？」
「うっ、うん！あったりまぇじゃ～ん！！」
やっぱり行くのはよそうかなぁ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「リング追加したよ。あと、ネックレスも、・・って、ちょっとぉ！アメ！聞いてるのぉ！！！？？」
「きーてますです。分かりましたなのです。ミーウェイ。ありがとうなのです。あ～ッ！コウヤ！リングが売れましたですよぉ～～」
「お。マジ？やったね！やっぱ俺は凄いんだな！！どーだ！ミーウェイ！見直したか！」
「ばーーか」
歳は１５・６くらいだろうか。３人の男女がパソコンをうまく弄っている。サイト名は「小悪魔通販」。
「次はだれにお手紙出したのですか？」
「さぁ？たくさん出しちまったもんでね！あたしゃちまちま覚えるよーな奴じゃないんだよ。」
「ちぇ。ミーウェイは役立たずなのです・・・・・・」
「うるさいな！」
アメと呼ばれた髪長の女の子はミーウェイと呼ばれていたセミロングの女の子にクスッと笑いかけると、またパソコンに向き直った。そしてもの凄い速さでボードを叩いていく。
「コウヤ、そこの箱に入っているリングを取ってほしいのです」
「はいよ」

コウヤと呼ばれたハリネズミ頭の男の子は渋々リングを取り出した。
「ありがと！なのですＶＶ」
アメはリングを受取り、リングをパソコンへ近づけた。その時・・・
・・・・・・・・！！

リングからものすごい量の光が溢れ出し、リングがパソコンに吸い取られていった。ズプズプとパソコンへ入っていく。入り終わったリングは「画像」のところで回っている。
「ふぅ、なのです。コウヤ。もうちょっとうまく作れないですか？？パソにいれるの疲れます。なのです〜〜」
「これが限界だっての！！あのな〜〜〜、俺も疲れんの！作るの疲れんの！！分かるかぁ！？オイ！！」
「べっつに〜、なのです。コウヤはどーだっていいのです。」
「てんめっ・・・・・」
「あはははははっ！コウヤばかじゃない！？あははははは！！やーぃ！莫迦！！ん？馬鹿かな？」
「どっちだっていいだろがぁ！」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
「やっぱり行こう！！」
亜衣奈は夕日がアスファルトに降り注ぐ道を早足で歩いた。今日は何かの縁か木曜日だった。
「どこに行くの？？」
いきなり聞こえた声に驚き後ろを振り返ると上月瞳がたっていた。
あたしの友だち。頭もいいしスポーツ万能・・ってどうでもいいか。
「ふぇい？？どーしたのよ！！瞳ィ！びっくりするじゃない！！」
あたしは間の抜けた返事をしてしまった事に気づき少し恥ずかしくなった。

「あぁ。ごめん。んで、どこ行くのよ？なんか気になるじゃない。教えて？」
「え？っとぉ・・・・いとこの家。週末に」
「ふぅ～～ん。あ、っそなの。なぁんだ。心配して損しちゃたァ」
「心配？なにがよ」
瞳はクスッと笑って目を細くした。そして「小悪魔通販ＶＶ行くのかと思っちゃった」と答えた。

「え・・・」
「あっ！なんでもなぁいの！忘れちゃって！ごめんねっ！じゃぁバイバイ！！また明日ぁ～」

ドキドキしたまま家に帰ると、あたしは何気なく新聞を開いた。いつもはテレビ欄だけ見るのだけれど今回は最初っから捲った。すると・・・
ぼぉっとしていたあたしの目に死ぬほど驚いた記事が飛び込んできた！

第二話：～怪奇事件～

「東京都内で怪奇事件多発！！
昨日の夜から今朝にかけて東京都内では怪奇事件が多発している。被害者はいずれも女性。しかし、死体が見つからない。被害者に一致するのはパソコンをしていた事、深夜2時ごろに誘拐されたという事、パソコンのそばに指輪やネックレスが入っていたと思われる箱があること、だ。警察は家族に事情聴取をしてもらっているとのこと。」

あたしはゾッとした。どの条件も小悪魔通販に一致する。やっぱやめようか・・・・。でも、いきたい・・・・・・・・・・。何でこんなに行きたいか自分でも分からない。あたしは無意識にケータイをとりだした。メールを送ろうと操作する。上月瞳に、メールを・・・・・・・・・
ひぃチャンならなにか分かってくれるかもしれない。ひぃチャンは勘がいいから・・・・・。
『いきなりごめん。ちょっと相談に乗ってほしくて・・。いまから、駅前で会えないかな??』
♪♪。メールが帰ってくる。
『いいよ。絶対メール来ると思ってた。でも、ケータイじゃダメなの?メール今してるジャン。』
『ごめん。むり。彩香と葉月が絶対受信ＢＯＸ見るから・・・・・・・』
『じゃ、駅前にね。待つのはイヤだからすぐに来てね♪』
『うん。すぐ行く』
あたしは、運動用のスニーカーをはいて駅前まで走った。自慢じゃないけど、走るのだけが得意。だからいわゆる運動馬鹿ってヤツ。

「おまたせ！ま・・待った？」
「ううん。全然だいじょーぶ。じゃ、あそこのカフェではなしする？」
瞳は先立って歩き出した。真っ黒な髪がライトアップされた町によく似合う。時々きらっと光って、すごくきれいな髪に見えた。カフェに入るときもその髪はゆらゆらゆれた。

「ふーん・・・。でも、それが小悪魔通販だっていう証拠はあるのかなぁ？」
あたしの話を聞き終わった後、アイスコーヒーをカラカラいわせながら瞳はつぶやいた。
「だって、条件が一致してるじゃない！」
「じゃ、小悪魔通販から来たとかいう手紙に、「画面に吸い込まれますー」なんて書いてあった？」
「そんなこと書いたらだれも来ないじゃない！！」
あたしは、オレンジジュースのコップの中に入っていた氷をガリガリ噛みながら少し怒ったように聞いてみた。瞳はちょっとびっくりした様だったけど、またいつもの顔にもどった。
「ま、そーだね。でも、あたしなら行くよ。なんかわくわくするじゃない」
「そーぉ？」
「うん！あーちゃんはいいなぁ。誰にももらえないチャンスをもらったんだからね」
「そっか」
あたしは、なんとなく晴れた気分でカフェを出た。瞳は後ろのほうでかるく手を振っている。あたしもしばらくは振り帰していた。

「馬鹿な子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
あたしは、後ろのほうで瞳が笑っていることには気づかなかった。
そう、この選択がすべての始まり。

「アメ～～。そんなにパソコンばっかり見てると目ェ悪くなるわよ～？」
うって変わってここは小悪魔通販運営者たちのアジト（？）。
「だいじょーぶですよ。ミーウェイ。ご忠告ありがとうなのです～♪でも、このごろリングの売れ行きが悪いのですよ。やっぱ新聞に載っちゃったからかな～なのです・・」
ミーウェイはお茶菓子を口に入れながら「でも、小悪魔通販って載ったわけじゃないじゃない。」と答えた。
「ちょっと待ってよ。俺が大量生産したヤツは全部パーってことか！？」
「だれもそんなこと言ってないでしょ。だからあんたは・・・あ～頭痛いっ！もー喋りたくないッ。特にあんたとはね。」
「なんだよ！」「ふん！もー一回言ってやる。あんたと喋りたくないってね！！！！」
アメは黙って二人の痴話喧嘩を聞いていたが、横にあるお茶を飲みながら、頬杖をついて考え出した。二人はそんなアメに気づかず、まだがやがやと喧嘩を続けていた。
（困ったな・・。人が入んないんじゃリングの製作もままならないし・・・・。っと、あのこは説得に成功したのかな・・？相手の子は相当馬鹿みたいだったし・・・大丈夫よね・・・）
いきなりミーウェイの声が頭の中に入ってきた。
「今日ってさぁ～、木曜日だったよねぇ？誰か来ると思うんだけどさ。はやく通販場所整理しないと、人間の体でぐっちゃぐちゃじゃないの？」
「そー言えばそーなのです！早くしないと！」

午前2時まであと7時間・・・・・・・・・・・・。

第三話：～いざ、小悪魔通販へ！～（前書き）

この話は全然ホラーがはいってませんので
ご了承を・・

第三話：～いざ、小悪魔通販へ！～

「出かけるのもいいけど、行き先言ってから行きなさいよね！」
帰ってきたあたしはこっぴどく叱られた。たしかにもう9時を過ぎている。お母さんは心配性だから早く帰らないといけなかったのに・・・・・・・・。
「ごめんなさぁい・・・」
あたしは適当に返事をして部屋に戻った。え～と、いま9時近くだから・・・あと・・6時間??
「6時間を切りましたですね・・・」
お風呂に入ってる間も、テレビを見ている間も、ちょっとドキドキしていた。怖いかもしれないけど楽しそう。あ、ひぃちゃんの言うことがうつったかな?
「オヤスミ～。お姉チャン」
「うん」

オヤスミって言ったけどあたしはこれからが本番！！！
でも・・・2時までどうやって時間ツブそっかなぁ・・・。そんなことを思いながら、あたしはケータイをいじっていた。
いじってたら以外に時間は過ぎていく。もう、のこり1時間になっちゃった。
もう1時かぁ。そんなことを思いながら、あたしはパソコンの電源をつけた。プッッとおとがして、真っ黒な画面に音が流れる。あたしは、これからＴＯＰ画面に行くまでの間がものすごく嫌いだ。
「小悪魔・・通販っと！」

これからどうやって時間つぶそう・・・。まぁ、そんなことはどーでもいいや。とにかく、財布を自分の際においとけばいいんだろうか・・・・？
向かいの家にも電気がついてる。あたしの部屋はパソコンの電気だけだけど。向かいの家の人もパソコン、してんのかなぁ～。
「あ・・・もう５６分じゃん・・」
あたしは急いで検索の欄に書き込んだ小悪魔通販の文字を確認した。ちゃんと書いてある。よし、準備は完璧！！
「５・・４・・３・・２・・１！いくぞっ！」
カチッ！検索の文字が押された。

悲劇の幕開け（前書き）

特に注意することはないです。
グロクもないし。怖くもないし。

悲劇の幕開け

パッと画面が代わって、「小悪魔通販」というサイトがひとつだけ出てきた。
「ぅ・・わぁ・・・。ほんとにあると思わなかったよ・・・」
カチッとクリックすると、本当に、正真正銘の「小悪魔通販」が出てきた。
見た目はとってもかわいい。ナビゲーターのわんこはもっとかわいい。あたしは思わず見入ってしまった。
「かわいい～～」

どのリングも素敵だった。なのにメッチャ格安。４００円・５００円程度のものばかり。
「きゃぁ～～」
あたしがひとつ、めちゃくちゃ気に入ったリングがあった。ハートのロゴが入ってる。キュ～ンってなりそう。
迷わずクリックした。もう、どうにでもなれ！って感じだった。
『ご購入有難うございます。かわりに、あなた自身をいただこうと思います」
え・・・？？？
いきなりデスクトップから白い手が出てきてあたしを掴んだ。
「きゃぁぁっ！」
ぐるぐると回りながらパソコンの中にいるあたし。デスクトップにはザーザーと雑音が流れている。

「うるさいなー。ちょっと、亜衣奈ー。何時だと思って・・・」
姉が部屋に入ったようだが、あたしにはそれが見えなかった。でも、姉の声だけは届いた。
「おねぇちゃぁーん！助けてーー」

でも、姉にはあたしの声が届かないようだ。
「亜衣奈!?亜衣菜!?どこよ!」
「ここだよぉぉ〜〜〜」
「返事してッ!亜衣菜ぁ〜〜」
「してるってばぁ〜〜!!」

どすん。
あたしはどこかに落ちた。
「いっ・・・たったったぁ・・・」
そこは廃屋みたいなところで、ホコリ臭い臭いがした。机があって、そこにパソコンが1つ。
あたしの前には、3人、男の子と女の子が立っていた・・・・。

第5話：～裏切り～（前書き）

特にはないです。
怖くもないし。

第5話：～裏切り～

「誰・・・ですか・・？」
あたしは、恐る恐る聞いた。
「私たちですか？小悪魔通販、管理者ですよ～」
髪長の女の子がにこにこして答えた。
「あたしを、どうしたいんですか・・？」
「ちょっと使わしてもらおうと思ってな」
今度は、髪の短い男の子がぶっきらぼうに答えた。

「おかぁさーーーん！亜衣菜が・・・亜衣菜が居なくなっちゃたぁーーー！！」
一方こちらは現世（？）。亜衣菜の姉、亜衣華が大騒ぎしていたころだった。
「！？どうしてっ」
「わ・・・・わからないっ。パソコンの音が五月蝿くて・・・・注意しにいったら・・・居なくなってた！！」

「多分、今頃、あなたの親は大騒ぎですね～。ぎゃぁぎゃぁですね～」
「うるっさいわね・・・ここから出してっ！！」
アメの目がとたんに変わった。
「そういう態度。取ってもいいと思ってるんですか？」
亜衣奈は驚いて目をまるくした。さっきまで優しそうに喋っていた女の子が別人だ。
「アメはさ、そーゆーの、プライドが許さないの。死にたくなかったら、おとなしくしといたほうがいいよ」
がちゃん。ミーウェイが、亜衣奈に話しかけたとたん、ドアが開いて、一人、少女が入ってきた。

「お、おかえりー。瞳。お前の作戦上々だったゼ」
瞳・・・・？瞳って・・ひぃちゃんのコト！？
「ひぃちゃん！？あなたひぃちゃんなの！？」
少女がこちらを向いた。冷たい視線があたしにぐさぐさ突き刺さる。
「そうだよ・・・。私は、あんたの友達だった、瞳だよ」

そうか。
こうなることはわかってた。
薄々だけど。
じゃ、なんでやめなかったの？
わからない
恐怖心より、好奇心が大きかったからじゃないかな・・・・・・・・・

でも、やっぱり、信じられない。
だって、そうでしょ？
自分の友だちが、自分を騙してて、自分の友だちが、その事になんの違和感もなくて、
自分の友だちが
今自分の敵である人たちの味方だなんて・・・・・・・

第６話：～世界は滅ぶ～（前書き）

ちょっとグロイです。
「小悪魔」シリーズ初の死人が出ます。
苦手な人は回れ右です。

第6話：～世界は滅ぶ～

「じゃぁ、私、疲れたから、寝させてもらうね」
「うん。おやすみ～。アンナ」
瞳は奥の部屋へ消えていってしまった。
「ねぇ、今、アンナって・・・？？」
「あぁ、瞳って言うのはコードネーム。本名はアンナ。上月アンナって言うんだよ」

！！

「じゃぁっ・・・・・！！」
「そ、上月瞳、なんていう人間は実在しなかったのよ」

そんなっ！！！

「えぇ！！？？亜衣奈が消えた！？瞳もいないって！？ほんとなの！？葉月！！」
朝の学校はいつもより騒がしかった。
「そ・・そうらしい・・・。でもね、さやりん、なんかおかしいんだって・・・」
「え！？」
彩香は椅子から身を乗出して、葉月を見た。
「な、なんかね。あーちんね、パソコンしてたみたいなの。そんでね、パソコンしてるときに消えちゃうって言う事件が多発してるの」
彩香は瞳孔がばっと開いた。そういえば、昨日、亜衣奈はパソコンの事らしき話をしていたかも・・・・。

「亜衣奈・・・大丈夫かなぁ・・・無事だといいけどなぁ・・・・・

」
「・・・・・・・そだね・・・・・・」
ひた。
何かの足音がした。
「？誰かいるのかなぁ？？」
ずりゅ・・・・・。
「待って、これ、足音じゃないよっ・・・・！？」
「い・・・・いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」
そこには、血まみれで、下半身が桑で潰されたようになっていて、内臓がはみ出て潰れている女の子がいた。
「・・・・・・・・・すけて・・・・」
「え！？」
「た・・・・・・・・・すけてぇぇぇぇ！！」
「助けてほしいのはこっちだってばぁぁぁぁぁ！！！」
走って逃げたけれどもすぐに追いつかれてしまった。
「いやぁ！」
「一人は・・・・寂しい・・・あなたも・・・キテ・・・」
「やだ！やだやだ！！さやりん！！助けてェ！」
「む・・無理っ！こいつ・・・ガホッ・・やたら・・力強いしっ・・・ガハァッ！！」
葉月の上に乗りかかり、彩香の首をギリギリ絞めてくる女の子は楽しそうに笑った。
「ねぇ・・この子・・よく観たら・・・亜衣・・奈に・・似てる・・・！？」
ばた。

二人は死んでしまった。
亜衣奈に似ている女の子みたいに、血まみれで、桑で潰されたみたいに。

「な・・・んてことを・・・・」
その一部始終を亜衣奈は見ていた、というか見させられていた。
「なんで!?あたし一人殺せばいいじゃないっ!!なんで・・・彩香と葉月まで・・・・」
「見せしめですよ。私達はいつか、都市伝説になります。死人の家来を引き連れて。あの二人も、これまで騙してきた人たちも、その一員です」
「そんで、お前もな」

絶句した。これから世界は滅んでゆくんだ。
「私達は、世界に知れ渡る都市伝説になるのです」

第七話：～いかれた悪魔～（前書き）

最後のほうがグロイです。要注意。

第七話：～いかれた悪魔～

世界は崩れる
世界は滅ぶ
あのときの、あたしの、行動によって・・・・・・・・・。

「おーい、届いたよ、体自体はけっこうぐちゃってるけど・・・・」
「ありがと、なのです。てきとーにダンボール箱にでも入れといてくださいです」
亜衣奈が上半身を起こして叫ぶ。
「なにすんのよ！あたしの友だちに！もっと丁寧に扱いなさいよ！！」
「うるっせーんだよ。てめぇ、自分の立場分かってんの？」
「コウヤ。私にお任せあれなのですよっ」
にこにこ笑って、亜衣奈の前に来たアメは、ちょこんと正座して亜衣奈をギロリと睨み付けた。
目は怒っているが口は笑っている。

「昔話をしてあげます。暇つぶしにはちょーどいいと思いますけど」
私達はここにくるまえは普通の人間でした。友達がいて家族がいて当たり前の、そのへんに溢れているような人間でした。
ある朝、私はふと外を見て思いました。なぜ、この世界は私中心じゃないのかしらって。
家があって、犬がいて、人がいて、当たり前の事ですが、それが私には許せなかったのです。
はじめに殺したのは両親です。次は友だち。先生。私は指名手配犯になりました。
世界が私を知っています。世界が私を恐れています。こんなことよ

り面白い事って他にありますか??
そんなときに出会ったのがこの子たちです。はじめはミーウェイ、次がコウヤ、その次がアンナです。
みんなおんなじ考えを持っていました。
だから私達は一つになったのです。

「とことんいかれてるね・・・・・あんたたち・・」
「そうです。昔から、人形を壊すのが大好きでした。お前は変な子だと、さげすまれました。
学校では飼ってたメダカを握り殺し、ウサギを鉈で引き裂いた事もあります。
怖くなんかなかった、自分の手が、他のモノの血で汚れる事が楽しかったです」

第八話：～死～

「あなたもいつまでもこんなところにいたくはないですよね？」
昔話を終えたアメが、亜衣奈の手を引いて、奥の部屋に入って行く。
「なにをぼさぁっとしているのですか～～。コウヤもミーウェイも来るのですよぉ～」
「？何でよ・・」
「い～からぁ～～」
アメは２人をちょいちょいと手招きした。

奥の部屋には、大きな鍋っぽいものがあった。大きいといってもただ大きいだけじゃない。亜衣奈の背の１０倍２０倍は軽くある。
その周りに、螺旋階段が取り付けられていた。
「こっち、こっちぃ～、ですよっ！」
アメはぴょんぴょんと階段を駆け上がった。
丁度真上まであがると、煮えぎった鍋が大きく口を開けて待っていた。
「ひっ・・・」
中で、人骨死体が浮き沈みしている。
「なにを怖がっているのですか？」
アメは全力で、亜衣奈に体当たりした。
すると、バランスを崩した亜衣奈が、鍋へ真っ逆さまに落ちていった。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
「その中はねー、人間の肉体と魂を別にするのー」
ミーウェイが叫ぶ。
「ほらよ！」
コウヤは、葉月と彩香の死体を投げ込んだ。
「葉月ぃぃ！彩香ぁぁ！いやぁぁぁ！誰か助けてぇ！！」

「さようなら。材料になってくれてありがとう！哀れな愚民共！！」

ドポーン・・・・・。

「あー終わった。じゃ、俺もう降りるわ」

「あたしも、帰ってご飯食べたいし。アメもいこっ？」

アメは鍋の中をじぃっと見つめていた。

「アーメッ！どーしちゃったの！？早く行こうよぉ～～」

「あ・・。はいっ。っと、ミーウェイ、今沈んだので何人ですか？」

ミーウェイは腕を組んで考えると、思いついたように口を開いた。

「ちょーど！５００万人！」

「サツも馬鹿だよな。事件の起こっている場所が別々だからって、新聞に載せただけで調べもしねぇ」

「あははっ、だよねぇ～。で、アメ、それがどうかした？」

アメはにぃっと笑って後ろで手を組んだ。

「いえっ・・。記念パーティでも開けそうな人数ですねっ！」

「わぁ！ほんとじゃ～ん」

「じゃ、そうするか！？」

笑いながら下りてゆくミーウェイとコウヤの背中を睨みつけながらアメは心の中で、高らかに笑った。

（ゆっくり味わえ！それが貴様らの最後の晩餐だ！！）

第九話：～狂い～（前書き）

アメが狂いに狂ってます
ご注意！

第九話：～狂い～

「ご馳走様っ！なのですよ」
アメは満足そうな笑みを浮かべて、パソコンのほうに向き直った。
「アメ～、パソコンもいいけど、そろそろリングとか作りたいんだけど」
このごろ、思うように死体が入ってこない。
「大雑把にやっちまったからな。サツも動き出したかな」
「かもね。でも、私らはそんな疑われてないし。気をつけんのはあんたよ。アメ」
「はい～」
（フン。雌豚が。いい気になりやがって。コウヤもミーウェイも、あいつに汚染されかけてそうね）
マトメテシマツシテヤル・・・・・・・・

こつん。こつん。
暗い部屋に足音だけが響く。
ゴポ・・ゴポ・・
軽く水音がする。
ここはさっき、亜衣奈が死んだ部屋。
亜衣奈達の遺体は、水の中に保管されている。
「こんにちわっ！ご機嫌いかが～、なのですよ
まぁ、もうこのキャラ捨ててもいいかな」

「アメ～ッ！ここにいたの。ちょーどよかったぁ。今からアクセつくろーと思ってさ」
ミーウェイがコウヤとアンナをつれて部屋に入ってきた。
「はいっ。でも・・ちょっと見てほしいものがあるの」
アメはまた螺旋階段を上り始めた。

後ろに3人が続く。
「どうしたの？改まっちゃって」
アメは3人のほうに振り向くと、にぃっと不適な笑顔を見せた。
「私の願い。覚えてるかしら・・・」
「え？」
「この世のすべての人間を消す。でも、もう限界。５００万人消せばまぁまぁよ」
「・・だから・・？」
「私が最も許せないのはね、私の周りで平然と生きている豚共よ！！！」
アメは一気に三人を突き落とした。

「アメ！！どういうことよ！！こんなところで裏切るなんて！」
「お前に手を貸してやったんだぞ！！」
「いやぁっ！しにたくないよぉぉっ」

「あはははっ！泣け！足掻け！もうどの道お前らには死しかない！！」

ドボン。３人も亜衣奈のように落ちていった。

「ひゃはははっ！けけけけけっ！あーっはっはっは」
その上には、狂った悪魔が一人・・・・・。

第十話：～幕引き～（前書き）

めっさグロイです。
要注意です。

第十話：～幕引き～

「はぁ・・・はぁ・・・。あははははっ。ひゃはははっ！！」

笑いながら螺旋階段を下りていく。

すると、水の中からビチャビチャと音がした。

「あ？なんだろうね。ククク・・・」

ズルリと這い出してきたのは、ぐちゃぐちゃに頭が潰れたミーウェイ。

額からドロドロ血を流しているコウヤ。

原型すら留めていないアンナ。

「どうしたの？まだ死んでなかったの？しぶといねぇ～」

「・・・」

「？なんだって？」

「お前も死ぬんだよ！クソが！」

いきなり手を掴まれて、アメは体制を崩した。

「あんたらが私を殺すつもり！？おいたもいい加減にしな！」

しかし、あっちはすでに化け物。こっちは人間。

疲れを感じてしまう分。足がもつれる。

「ちぃっ！」

「裏切り者！お前もこい！お前は地獄に落ちるんだ！」

「地獄！？その前に閻魔様とやらをぶちのめしてやるよ！！きゃはははっ」

もう、限界かな。

あいつらに殺される最後なんて気に食わないけど、

サツに殺されるよりか、ましだろう。

「あは・・あはは・・っ・・。やってみな！私を殺してみな！怨霊なんだろ！？なんでもできんだろ！」

グチュウ・・・
肉が潰れる音が響く。
「きゃぁぁぁぁぁぁぁっ！あはははははぁーっ」
メリ・・・
頭蓋骨が砕ける音が鳴る。
「きいやぁぁぁあ！！ひゃはははははっ！！」

亜衣奈はそのころ、魂だけが、ここにいた。
（・・・何か見える・・・）
目に映ったのは、ぐちゃぐちゃのアメだった。
（ひぃっ・・・！！）
何度刺されても笑いながら立っている。
（やめて・・・っやめて・・・っ！！）

「くけけけけけっ！あはははは！きゃはははははっ！！」
（きゃぁぁぁぁーーーーっ！！）

「アメ・・・・・。あんた本当に壊れちゃったんだね・・・・・・・・」
ミーウェイが、無いはずの目から涙を落とす。
「はぁ・・はぁ・・。どうしたのよ？もう終わりぃ？あっけない幕引きねぇっ」
「一緒に逝こう？アメ。もう、俺らに生きる場所なんてない」
「はあ？言ったでしょ。私が許せないのは私の周りに生きてる奴だって」
アメはえぐられた目でコウヤを睨み付けた。

「終わりだ！！あんたと一緒に私らも死ぬ！！」
ビチャァ・・・
アメの血液が回りにとんだ。

「ごめんな。あんたはたぶん、天国逝けるよ」
（・・・・・・・・あなた達はもう・・・無理なのね・・・）
「あぁ、じゃぁな。できれば俺たちを恨まないでくれ」
（それはできない相談ね）

「ひゃ・・・ひゃはは・・・。あーっはっはっは！」

こんな都市伝説、知ってる？
木曜日の午前2時に現れる裏サイト、「小悪魔通販」
そこはね、いかれた悪魔の住処。
指名手配犯が、愚か者を捕らえようと待ち構えているの。
でもね、指名手配犯は死んじゃった。
なぜかって？裏切り者だから。
裏切り者は、仲間なんて作らないけど
同士なら作っちゃうかもね。
だから、気をつけて。
もしかしたら、すぐ後ろで、あなたを捕らえようとしているかも・・・。
「そんな話あるわけないじゃん」

あら？どうしてそう思うのですか？なのです。
「だって、非科学的。ありえねーしさ。証拠がないじゃん」
証拠なら、ありますですよ。

「どこに!?馬鹿なこと言うなよな〜。きゃははっ。おもしろ〜い」

あんたの後ろにいる
女の子
そのこはね・・・・・・・・・・・・・

「きゃぁぁぁぁーーーーっ!!!」

気をつけて
そんな話はない・・・・・・なんて思っちゃったら終わり
言ったでしょ?
アメは凄くプライドが高いって。

ほら、すぐ後ろに・・・・・・・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7708a/

小悪魔通販へようこそ

2010年10月20日18時57分発行